

移民のための文学コンクール エクセトラ賞¹⁾

山根美奈

はじめに

「小説は移民を理解するための道具となる」。「文学は、社会学や人類学以上に移民現象を理解する助けになる」と言ったのはフランス文学研究者アブデルカデル・ベナルブ²⁾である。この言説を裏付けるように、イタリアにはマイノリティを対象とした文学コンクールが複数あり、これまでにイタリア語で小説、詩、エッセイを出版した外国人著者が534人³⁾も誕生している。中には祖国でも文筆を生業としていた者もいるが、それはほんの一握りであって、大部分はイタリアに来て初めて文章や詩を書き、コンクールを登竜門として世に出た人々たちである。しかも、イタリア語は、イタリア国内だけで通用する言語であるところから、イタリアに来て初めてイタリア語と接した人々ばかりだ。移民と言語については、アイデンティティと密接な関係にあるとしてこれまで縷々述べられてきたが、イタリア語は移民にとってどのような言語なのか。比較として、英語、フランス語の例を見れば、アフリカ文学研究者のサイモン・ギカンディは「植民地時代に英語、フランス語は、アフリカ、アジアの様々な文化の上に君臨してきた」⁴⁾と記しており、「マグリブ文学には今でも植民地時代の影響がある」⁵⁾と移民芸術研究者のエウジェーニア・マツァも述べている。それに対して、イタリアの植民地政策は、比較的短期間であったことはどの研究者も認めるところである。加えて、初期のイタリア移民は、イタリアの植民地の人々ではなく、マグリブの労働者たちだった。データを見れば、1991年の出身国別滞在許可数⁶⁾の上位5ヶ国は、モロッコ、チュニジア、フィリピン、ドイツ、旧ユーゴスラヴィアであり、旧植民地のソマリア、エリトリア、エジプトは、合わせて全体のわずか2.8%に過ぎない。イタリア語に対するアレルギーがあったとしてもその声は小さく、思想や階級と強く結びつく言語ではなかった。その事が、イタリア語での文学活動を盛んにしている一つの理由だ。また、この文学的潮流の源になり、書き手を触発したのが、移民のためのエクセトラ文学コンクールである。このコンクールは、一人のジャーナリストが中心となって設立され、リーミニやマントヴァの自治体を動かし、ローマ、ボローニャの大学を動員して運営されてきた。そのきっかけが、当時急増していた国際結婚だった。なぜ国際結婚が急増し、それが文学と繋がったのか。本稿ではまず、文学コンクールを誕生させた当時の社会状況を振り返る。そこでは、他のヨーロッパ諸国にはない、イタリア独特の移民事情と移民排斥運動にも触れることになる。移民軽視の社会において、移民を対象としたコンクールは、当初から日の目を見ていたわけではなかった。また、政治政策によって浮沈するのも移民という立場であることがこのコンクールの存在によって明らかになる。「移民理解の一助のため」として移民の発話の場を提供したコンクールは、移民文学を「合法、不法に関わらず、異文化間を移動した人が語ったもの」と定義し、使用言語をイタリア語に限定した。コンクールを継続する中で、隆盛の時を迎えるが、予想しなかった

移民二世の出現に移民文学の定義が崩れる。以上、本稿では異なる言語、異なる文化的背景を持つ人々を、いかにイタリア社会に融合させ、イタリア語での著作活動を推進していったか、移民のためのエクセトラ文学コンクールの歩みを明らかにする。

移民のためのエクセトラ文学コンクール誕生の経緯

リーミニの女性ジャーナリスト、ロベルタ・サンジョルジ (Roberta Sangiorgi) が国際結婚を頻繁に耳にするようになったのは、1990年を過ぎたころだった。それに先立つ1980年代のイタリアは、石油ショック⁷⁾を契機として、イタリアに流入を始めた北アフリカやトルコ人労働者らに加えて、世界各地から仕事を求めて入国し、安い労働力を提供する人の姿が目立つようになっていた。地中海に突き出た半島にあるこの国は、その地理的条件から、外国人の往来には歴史的に寛容であった。その上に、年間4500万人を超える外国人観光客は、経済目的の労働者の潜入を容易にしていた⁸⁾。この状況に、社会学者らは、警鐘を鳴らし、マスコミは非常事態を喧伝していたが、政府は、外国人労働者の雇用に関する法⁹⁾を施行したものの、その法が機能しない状況にも「見て見ぬ振り」¹⁰⁾であった。

これが、80年代のイタリアの移民の状況である。ところが、1989年8月25日、その後の移民にとって、また、移民文学にとっても重要な事件が起きる。それが、イタリア青年による亡命者ジェリー・マスロ殺害事件¹¹⁾である。

この頃、人種差別に類する事件は日常茶飯事だったが、この事件の被害者が、国連の難民保護条約で保護されるべき存在だったことから、政府の無策が糾弾された。一般大衆は、低賃金で無保証、劣悪な環境で働く不法移民の実態を知りたがり、新聞、テレビはそれに応えて、より悲惨は状況を報道する。その一方で、後に「北部同盟」¹²⁾を名乗る地方政党「北部の国民」は、自国民中心主義キャンペーンを展開して不法移民に対する敵意を煽った¹³⁾。翌1990年2月、政府はついに初の移民法、通称マルテッリ法¹⁴⁾を施行した。この法は、不法移民の合法化を推進していたので、合法化された中からイタリア人女性との国際結婚に踏み切る人が出始め、その噂がジャーナリスト・サンジョルジの耳に届いたというわけである。かねてより、異なる文化の融合に興味を抱いていたサンジョルジは、早速、こうした国際結婚の特集記事を組むために、新婚カップルにインタビュー取材を開始する。インタビューは、異文化統合の話題から、新郎が祖国を出て職に就くまでのプロセスが主たる内容となっていった。話を聞くうちに、彼らが、決まって口にしたのは、祖国を出てからの体験を自身で「書きたい」という言葉だった。それも「彼らのように」というのだ。彼らが言う「彼ら」とは、1990年に自らの経験を綴って出版したセネガル人パプ・クーマ¹⁵⁾やチュニジア人サラハ・メスナーニ¹⁶⁾のことだった。彼らの書籍について、ローマ大学ラ・サピエンツァの比較文学教授アルマンド・ニシは、次のように述べている。

「…1990年、わが国の文学にとって驚くべき2冊の本が出版され、イタリアの書店に現れた。(略)それは、語り部にして主人公たる二人のアフリカ人が、イタリアでの移民としての旅を綴った小説風自伝だった。これらの本は、有力な出版社から刊行されたため、すぐ

さま新刊として書店に並ぶことになった」¹⁷⁾。

ここには、語り部にして主人公たる二人が旅を綴ったとされているが、実は、彼らが文章を書いたのではなかった。それについて、移民芸術研究者マッツァの論文から引用する。

「これらの作品は、特殊な性格をもっている。(略) 四本の手による執筆プロセスを経ていることだ。つまり、移民作家は、彼の意に沿う第二の作者の協力を得ているのであり、その結果、作品の心情にあった正しいイタリア語に翻訳された」¹⁸⁾。

セネガル人著者のクーマも当時を振り返って、「これらの出版物は、アフリカ出身の移民とイタリア人ジャーナリストとの共同作業のおかげで誕生した。それゆえ、以来、「四本の手で書かれた本」とされている」¹⁹⁾と述べている。つまり、二人のアフリカ人は、書いたのではなく、共著者となるジャーナリストの求めに応じて、自分たちの経験を語っただけだったのだ。しかし、ともかく、こうして書かれた二作品は、当時の不法移民たちの暮らしが赤裸々に綴られていると、「証言文学」あるいは「告発の書」、また、「オデュッセイア」との冠をメディアから授けられた。特に、メスナーニの『インミグレート』は出版と同時に、ピエロ・パオロ・パヅリーニ賞の第六部門を受賞している。ところが、こうしてこう評価を博す一方で、有識者の有志らが、社会的見地からと称して覆面取材、潜入調査を行った。その結果、「一般常識からみて、イタリア人のふるまいに対して悪意があり大げさである。云々」²⁰⁾と報告し、「不法な書籍という烙印」²¹⁾を押ししたのである。すると書店は、掌を返したように、書籍を店頭から消し去り、出版社も無かったことのように口をつぐんだ。

移民にかんする書籍にはこのような背景と経緯があった。大手出版社や書店が背を向けている時期だったが、サンジョルジは、1990年に施行されたマルテッリ法が、「インテグラツィオーネ (Integrazione)」という用語で移民との統合、融合を強く喚起していたことを考え併せ、移民たちの書きたいという要望を尊重した。ただし、「四本の手」ではなく、イタリア人の介在なしの、移民自身が書いた文章でなくてはならないとし、その受け皿として、移民に限定した文学コンクールを立ち上げるのである。それが、移民のためのエクセトラ文学コンクールだった。次には、このコンクールがどのように開催されたのか、明らかにする。

第一回移民のためのエクセトラ文学コンクール

エクセトラは、Eks & Traと書く。Eksは、ギリシャ語のExの音と意を取り、「祖国を出て」、Traはイタリア語の「我々の中へ」という合成語である。&には、「困難さと出会いの豊かさを合わせる接続詞」という意味が込められている。

作品募集のチラシには、イタリアの移民が多国籍、多民族で構成されていることを表して、イタリア語、英語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、そしてアラビア語で応募要項が書かれている。名称は「エクセトラ文学コンクール」とし、「多様な文化の運び人である移民をイタリアの民衆に知らせ、異なる表現と伝統の間の統合を助けるために行う」と謳っている。

続いて、応募規定の一、合法、不法を問わず、東欧、アフリカ、アジア、ラテン・アメリカ出身の全ての移民に開かれている。その二、作品は詩（最高100行）と物語（60字×30行、12枚以内）の二部門である。その三、イタリア語、あるいは母語にイタリア語訳添付のこと。その他に、入賞作品の選集を編纂すること、二部門三位まで賞金が出ること等が明記されている。さらに後援のリーミニ市文化センターと協賛の旅行代理店、書店のロゴマークも入れられている。作品募集の準備段階からリーミニの地方紙が興味を示し、小さな記事を掲載すると、方々から問い合わせが寄せられた。2008年、筆者との面談の折、サンジョルジは当時のことを「コンクール開催の記事は、国内の新聞メディアにはたくさん掲載された。ローカルな新聞社が小さな記事を出したところ、全国紙、週刊誌が問い合わせてきた。すると次にはラジオ・ライ1の『ヌオヴィ・イタリアーニ』やラジオ・ライ2の『ベルメツ・ディ・ソッジョルノ』といった番組でも取り扱ってくれた。宣伝のための費用は一切使っていない。テレビで取り上げてくれたのはTG2の『ノン・ソーロ・ネーロ』という移民対象の番組だった」と語った。

報道各メディアが、このように素早く反応した事実は、1990年の移民の書籍取り下げ事件を経ても、イタリア社会には、移民についてもっと知りたいというニーズがあった証である。同時に、報道量の多さは、移民にも広く届き、書き手として覚醒させた。ミラノ郊外の刑務所で服役中だったシリア人ユーゼフ・ワッカスは、テレビ番組を見て塀の中から応募してきた一人である。それを知った時のことを移民のウェブ雑誌『カフェ』²²⁾に書いている。

「テレビは点いていたが、見ていなかった。有色と見える若い女性が移民について、統合や寛容の話をしていて。さして興味のある言葉ではなかったが、移民に特化した文学コンクールについて話すのを聞いた。すぐにペンを取り、急いで雑誌の表紙に住所を書いた。私はその夜から書き始めた」。

ワッカスは、1982年、イタリアへ入国し、バルカン半島からの麻薬の運搬にかかわっていた。1992年、麻薬取引と偽造旅券所持の罪で収監されている。イタリアへ来てから10年以上が経過し、会話には不自由しなかったであろうが、文章を書いた経験はなかったという。テレビ番組でコンクールがあるのを知った日から書き始め、一編の詩とショートストーリー三話のオムニバス小説を仕上げ、応募した。

1995年5月、コンクール第一回には40点の作品が集まった。作者の出身地域は、北アフリカ、中央アフリカ、東欧、中東、南米など、特別な地域に偏っていない。また、主催者の予想に反して、90%の作品がイタリア語で書かれていたことに驚かされたとサンジョルジは語っている。ワッカスのように、不法ながら、長年イタリアに在住していた者の他に、モロッコ人D・アブデルカデル（農科学）、アルバニア人Z・ドゥローゾ（医学）やイラン人V・バルディヤス（政治経済学）のような留学生も応募していた。研究者マツァはこの現象を次のように記している²³⁾。

「このコンクールは、もともとは書き手ではなかった作者らに空間を与えた。作者らは、自らの経験を語ることで、移民にかかわる社会問題について、イタリア人読者の注意を喚起

したいという願望にかられて書き手になった」。

しかも、応募してきた彼らの文章の質は高く、これもサンジョルジの予想を裏切った。というのも、「移民自身が書いた文に限る」ことを応募条件にしたことで、もっと拙い文章が寄せられるだろうと彼女は考えていたのだ。こう考える元には1990年に出版されたセネガル人クーマの書籍が少なからず影響していると筆者は考える。クーマの文章は、彼が書いたのではなく、監修として明記されているジャーナリスト・ピヴェッタが、クーマの話聞いて、クーマらしく書いたものである。その文章には、実は、次のような特徴がある。言語学者セルジオ・ヴァンボルセンの論文から引用する。

「文章は非常に単純にして、次々に新しい語りの要素が小さなフレーズで続く。(略) イタリア語のSVOの構文からは逸脱し、口承的な語順がみられ、構文が乱れたところへ、しばしばla, le, lo, liなどの直接補語が挿入されて関係性を示している。また、条件法や接続法であるべき動詞が、直説法で語られている」²⁴⁾。

つまり、外国人の舌足らずな、片言の語りが反映された文章なのだ。読んだ者に、外国人が書いたと思わせるに十分な文章に仕上げられたのは、ピヴェッタがイタリア人だったからではないだろうか。イタリア語を母語としない者ならむしろ、間違えやすい、条件法や接続法を正しく書こうと努力するはずである。ワッカスは、時折、看守の助けを借りたと打ち明けている。留学生や他の応募者たちも正しく書くことに努めたことで質の高い文になったのである。

これら、集まった40点について、コンクール第一回の審査が行われた。審査員は、発案者、後に主宰となるサンジョルジと後援のリーミニ市文化センターが選んだローマ大学比較文学教授A・ニシ、ハノーバー大学(米国)教授でイタリアの移民文学研究者グラツィエラ・バラティ、セネガル人フランス文学教授サイドウ・M・バ²⁵⁾、ソマリア人作家シリン・R・ファゼル²⁶⁾の四名である。彼らによって選ばれた第一回の受賞者とサンジョルジの寸評²⁷⁾は次の通りである。

詩の部門、1位、ヴァンサン・デポール(コートジボアール)、「異文化の接触によって起きる問題を多面的な視野で、沈黙の中に隠れた移民の痛みと疎外を書いた。憐れむのではなく希望の経験として表現している」。2位、ヴィーダ・バルディヤス(イラン)、「幻であり、不変の存在でもある遠くにいる祖母の姿を、イタリア語の詩として織り、語った」。3位、イネス・ヴェントゥーラ(アルゼンチン)は、「怒りの詩人。不安と自由を鞆に閉じ込めて、未来のために過去さえも捨てる旅人である」。

物語の部門、1位は、タハール・ラムリ(アルジェリア)、「移民の世代間に生じる文化的アイデンティティの危機と停滞した状態の記述において、物語表現が成熟している」。2位、クリスティアーナ・デ・カルダス・ブリト(ブラジル)、「家政婦とイタリア婦人のモノローグはほとんど言語的パロディーである。過去と現在の状況について郷愁とユーモアがある」。3位、ポール・バコーロ・ンゴイ(当時ザイール、現コンゴ民主共和国)、「イタリアの経験を我々と共通の現代に位置付けて、男性であれ女性であれ、彼の登場人物が生き生き描かれている」。最後に、審

査員特別賞としてワッカスが受賞した旨、記されている。受賞理由は、「軽妙且つ注目に値する言語的創造力を駆使して、複雑な作品をより合わせ創作している。多民族の個々の視点を受け入れ、自伝的叙述を越えたものとしている」とある。ワッカスのオムニバス小説は、12枚までという応募規定を優に超えて、選集の36ページを占める、所収の中で一番の長編である。審査員特別賞の知らせを聞いた折の感想を彼は、次のように述べている。

「1995年春、私の書いた物が受賞したと聞いた時、私は、新しいアイデンティティを獲得したように感じた。以前は、私は自分のアイデンティティに逆らい、お払い箱にしていた。しかし、今、待ちわびていた対話が始まった。囚われていても、自由を感じる。どこかで、いつも、誰かが私の言葉を読んでいるという確信がある。同時に、遠くからでも、共通の事柄についてディスカッションできる。これは小さなことではない」²⁸⁾。

第一回のコンクールに応募した40点の中から優秀作を取めた選集『レ・ヴォーチ・デッラ・アルコバレノ』²⁹⁾が編纂された。選集は、縦17センチ、横12センチ、厚さおよそ1.5センチ、190ページのポケット版である。表紙は、青の濃淡の変形幾何学模様タイトルが白で抜いてある。出版は、1990年の一件以来、大手の出版社が移民関係の書籍から手を引いていたので、リーミニに隣接する小さな町の小さな出版社、ファーラ・エディトーレ社が引き受け、1000部が刷られた。価格は一冊20,000リラ。この価格は、当時の同社の他の書籍と比較して、同等の価格である。表紙を開けると、監修サンジョルジの前書きの後に13ヶ国の、異なる国籍の21名の作品、25点が作者の氏名と国籍を明記して所収されている。コンクールに応募してきた半数以上が滞在許可を持たない不法な存在だったが、彼らの氏名、国籍も明記された。それは画期的なことだった。移民支援団体カリタス・イタリアーナの定期刊行誌2003年版³⁰⁾の冒頭に、合法化による身分の変化について解説している。それによると、合法化された人は、「匿名から脱し、自身の文化的アイデンティティを取り戻し、社会貢献することだ」とある。裏を返せば、不法な存在の時は、本名を名乗らず、匿名、ニックネーム、あるいは、男女の別、国名、肌の色、労働者というような一般名詞で表す状態だということになる。それならば、選集に本名、国籍を明記するということは、いかなることか。それは、いわば、文学の場における合法化ではないだろうか。これは、法的なものではないが、不法な立場で隠れ住み、権力の目を盗みながら働いてきた者にとって、充分な身分証明となり、次なる執筆意欲を掻き立てたのである。第一回の選集に収められた21名中8名の作者が、第二回目にも第三回目にも再応募し、このコンクールをきっかけに文筆家となり現在も執筆活動を続けていることは、特筆すべき事柄である。

ではこの時期、イタリア社会では合法、不法に関わらず移民、外国人労働者をどう見ていたか。前出のカリタス・イタリアーナの同じページに、移民の存在について、「イタリアの文化とアイデンティティへの懸念、仕事への脅威、公共の秩序と安全への恐れが根強い」とある。つまり、移民は文化を汚し、仕事を奪い、不安を煽る存在というわけだ。また、社会学者アレッサンドロ・ダル・ラーゴは、90年代のイタリア社会の移民に対する考えは「あらゆる層にとって理想的な敵である」³¹⁾と述べている。1995年、新たな通達が出され、「軽犯罪を犯した外国人は、通常の裁判や上告の機会もなく、即時国外追放、国境へ連行のこと」³²⁾という条項が付け加えられた。

この措置は市民を二分し、移民擁護派が反人種差別のデモをする一方で、反移民の市民たちによる不法移民摘発のパトロール隊が組織された。正規の身分証を所持しない不法移民は、市民の目につかないところに潜り込むしかなかった。このような状況だったので、彼らにとって、エクセトラの氏名、国籍を明記した選集の重要性が推察されるところだ。

コンクール第二回目の応募総数は、前回の3倍、125点である。選集『モザイチ・ディ・インキオストロ』³³⁾を編纂し、12ヶ国、12名の18点が所収された。第三回は、158点の応募があり、選集『メモリエ・イン・ヴァリージャ』³⁴⁾に所収の作品は、19ヶ国、29名、44点である。第四回はさらに増加して181点を数えた。選集『デステイーニ・ソスページ・ディ・ヴォルテ・イン・カンミーノ』³⁵⁾は11ヶ国、15名の25点を所収している。ポローニャ大学イタリア語研究科のペッツァロッサは、この状況を「エクセトラは、消えかけていた文学の流れを再び活気づかせ、集団的現象として提示した」³⁶⁾とし、さらに、「当初の作品は、日記的な証言や冒険的な自伝であったが、そうした枠から抜け出して多様な語りへと作品のテーマに変化をもたらした」³⁷⁾と述べている。国際結婚をした人たちがサンジョルジに「聞いてほしい」、「書きたい」と言ったのは、いわば証言的な体験記だったのだが、コンクールが回を重ね、再応募してくる作品が多くなるにつれて、その内容は、体験記の領域を抜けて創作的な文章へと移行した。審査員を務めていたローマ大学教授ニシは、第四回の選集の前書きに、再応募してくる作者たちの名前を挙げて、「今や、移民のイタリア語作家らはイタリア文学界や書店が無視できない軍団を形成している。(略)私は、移民によって書かれた文学の最近の状況をカルスト(Carsica)と定義した」と述べている。カルストとは、石灰岩の台地のことである。なぜカルストなのか。ニシは、次のように続ける。

「それは、文化的産業やマスコミから文学の市場まで、見えない状態にされているからだ。しかし、見えない代わりに、すぐ下の地のはらわたの中に、イタリア社会のヴォランティアと非営利団体が設えたふさわしい場所で枝分かれしながら流れている。隠れているがポジティブであり、エネルギーで旺盛である」。

つまり、出版社、マスコミ、書店らが興味を示さないところに、新しい文学の流れができていくことをカルスト台地に喩えたものだ。しかし、このカルスト台地は、ほどなく新局面を迎える。明るい場へ引き出され、見えない存在から見える存在へと変化するのである。併せて、イタリア語による移民文学の隆盛期を迎える。しかしこの変化は、皮肉にもエクセトラ文学コンクールを終焉へと向かわせるものだった。どのような変化があったのか。なぜ終わらなければならなかったのか。次に明らかにする。

移民のためのエクセトラ文学コンクールの隆盛と終焉

コンクールの回を追うごとに応募数は増加していたが、イタリア社会への周知が進んでいない状態を指して、ローマ大学教授ニシは、カルスト台地に喩えた。主宰のサンジョルジも、コンクール開始当初「もしかすると、ニッチな、狭い場所に留まるのではないかと、内心、危惧

を抱いていた」と後述している。第一回目から審査員を務めるハノーバー大学教授パラティも、「見える存在になってほしいと、コンクールのタイトルに“Tra”（我々の間に）を用いた」と、もどかしさを第二回の選集に記している。しかし、振り返ってみれば、もどかしいと感じていた時間は、それほど長いものではなかった。イタリアの政権が動いた時、変化が訪れた。

イタリアの政治は、戦後から40年余り、キリスト教民主党が中心となり連立を組みながら政権を担ってきた。ところが贈収賄疑獄によって信用失墜し、ついに、1994年の総選挙で議席を失う。代わって政権の座に就いたのが、ベルルスコーニ率いる右派連合だった。しかし、これ以降のイタリアの政治は、主権が左右に目まぐるしく入れ替わる。この時もわずか2年でプロディ左派連合に入れ替わった。新しい左派連合政権は、高齢化したイタリア社会にとって移民の労働力は不可欠として、機会均等省³⁸⁾なる新部署を創設した。ここからエクセトラの変化が始まった。

1998年、機会均等省の二代目の大臣にラウラ・バルボ³⁹⁾が就任した。バルボは、政治家であり、社会学者だった。特に、人種差別問題の専門家だったので、エクセトラ移民文学コンクールには早くから注目していた。1999年6月、バルボは、「イタリア人作家と同等に評価される機会を移民作家に与えている」としてサンジョルジと移民作家を表彰すると発表した。ローマの大統領府に招かれたサンジョルジと代表の作家らは、時の大統領チャンピ⁴⁰⁾から銀メダルを授与されたのである。ニシの喩えを借りるなら、カルスト台地が割れ、ローマの最高府から光が差し込んだのだ。だが、この年にもたらされた変化はこれだけではなかった。北イタリアは、パダノ平野の中央に位置するマントヴァ市が、市の文化事業としてエクセトラ文学コンクールを迎えたいと申し出てきたのである。

マントヴァ市とその近郊には、広大な農地と中小の工場地帯が点在しており、外国人労働者が働き、暮らしていた。そこには、家族呼び寄せによって入国した子供たちや、既述した通り、国際結婚によって生まれた子供たちもおり、彼らが幼稚園や小学校に通っていた。そこで同市は、異文化教育センターを創設し、十分な予算をもって移民のための文学コンクールの誘致を考えたのだった。

多文化協会エクセトラ⁴¹⁾なる非営利団体を立ち上げ、その主宰になっていたサンジョルジは、コンクールだけではなく、新たな活動の構想をもってマントヴァ市の異文化教育事業に参画を決める。新たな活動の一つは、子供たちの異文化教育だった。サンジョルジがこの企画を推進した理由は、子供たちに多様な文化を提示する他に、移民二世に、彼らの祖国の文化を学ばせたいという考えがあったからだ。この活動は、多国籍の作家が参加して、地域の小学校を訪問する形で行われ、交流の成果や討論の内容を発表する機会も設けた。二つ目の活動は、移民作家と研究者を集めた移民文学フォーラムの開催だった。ボローニャ大学イタリア語研究科の協力を得たフォーラムには、ヨーロッパ諸国の移民文学研究者や移民作家、加えて、国内の出版社も傍聴のために参加するなど、賑わうものとなった。ローマ大学比較文学研究科が開設したデータバンク・バジーリ⁴²⁾によれば、1990年代に始まった移民作家の出版物は、1998年から増加の傾向にあり、2005年には年間127冊、2006年は205冊を記録している。また、マントヴァの異文化教育センターと多文化協会エクセトラの活動に対し、教育省、機会均等省、そして文化財と文化活動省⁴³⁾の後援を得られたことは、特筆しておくべきだろう。その他、マントヴァ

県の移民評議員会やコープ・イタリア生活協同組合等、官民の団体が協賛した。つまり、エクセトラは、移民文学ばかりか、異文化交流の中心的存在になっていったのである。しかし、サンジョルジは、各活動が隆盛の中、2007年をもって文学コンクールの終了を決断する。サンジョルジがインタビューで語ったその理由は、次の三つである。

その第一が、政治によって社会の空気が変わったことだった。1996年から2001年までの左派連合政権は、移民統合政策を展開し、エクセトラも銀メダルを授与されるなど、追い風となっていた。しかし、右派連合に政権が移り、2002年7月に改訂移民法、通称ボッシ・フィーニ法が施行されると空気は一変した。法案を作成したボッシ、フィーニ両氏はそれぞれ、反移民を公言する政党、北部同盟と国民同盟の党首である。前年の9・11アメリカ同時多発テロ事件の影響があったとはいえ、移民の統合という政治文化は影を潜め、強制送還が前面に出る厳しさは、「寛容0(ゼロ)」政策と呼ばれた。その後のイラク戦争により経済停滞を招いたことも社会の空気を大いに変えていた。

第二の理由は、12年続いたコンクールに一定の成果を得たと自認したことだ。その証が、エクセトラ賞受賞者の中から、イタリアの誰でも知っている文学賞受賞者が出たことである。詩の部門ではアルバニア人ジェジム・ハイダリ⁴⁴⁾がエウジェーニオ・モンターレ賞及びウンベルト・サバ賞を受賞した。ハイダリは、祖国アルバニアで国語教師だったが、反体制運動に加担、告発記事を書いたことで追われ、1992年にイタリアに不法上陸した。当初、左官、倉庫番、厩舎番などしながら詩を書き、エクセトラ賞には第一回から応募した。その時の詩は、亡命、孤独、雨をテーマに書いた詩集⁴⁵⁾から切り取った「いつも雨が降っている / この国に / きっと / 私が外国人だからだろう。」と「貧しい国に生まれた / 私の身体は / 記憶を持たない / 盲目の一行詩だ。」である。ハイダリの詩のスタイルについて、研究者ラウラ・トッパンは、「ウンガレッティ、モンターレを踏襲するもので、いくらかの例外を除いて、ほぼ四行配列の自由詩で、句読点が少なく、わずかな韻文、異なる諸韻、子音韻、頭韻で成っている」とする⁴⁶⁾。ハイダリは、「詩人は、時代と民衆の代弁者であらねばならない」として、自身の詩を「終わりのない長い叙事詩の他になく、私は、現代の苦しめられた男に向けて詠う詩人だ。」⁴⁷⁾と言う。これについて研究者アンドレア・ガッツォーニは、「これは逆説だ」とし、ハイダリの詩は「叙事詩と叙情詩の交差点にある」と持論⁴⁸⁾を展開している。叙事詩か叙情詩か。いずれにしろ、研究者から「亡命の詩人」と名付けられたハイダリが詠う望郷と寂寥は、亡命者ならずとも、故郷から、あるいは遠い時間から隔絶された者が身体の奥に抱える普遍的な感情と実情を詠って共感を得た。イタリア語とアルバニア語を併記する二言語主義を貫き、決して母語を手放さない。そこにも叙事と叙情の交差点が垣間見られる。

ハイダリのモンターレ賞受賞は、エクセトラに一つの成果をもたらしたが、物語の部門でも同様の例がある。2001年にエクセトラ賞を受賞したクロアチア人タマーラ・ヤドレイチッチ⁴⁹⁾が2004年にイタロ・カルヴィーノ賞を得ていた。これも高名なイタリアの文学賞である。さらに、2005年以降の応募作には、100頁を越える大作が寄せられるようになった。そこでサンジョルジは、次のようにコンクール再考する。「もし、文学作品をもって相互理解の一助にしたいと考えるなら、移民作家たちは、移民に特化したコンクールではなく、移民であろうとなかろうと、全ての書き手に門戸を開けているコンクールに取り組むべきではないか」。これがコンクール終

了の第二の理由である。

第三の理由は、移民二世作家の台頭だった。2000年以降、多数の移民二世の作品が寄せられた。その代表が、ローマに亡命したソマリア人両親から生まれたイジーバ・シェーゴである。彼女は、ボッシ・フィーニ法による外国人再登録の際の体験を綴って2003年のエクセトラ賞を獲得した。体験記とはいえ、移民一世とは異なり、イタリアとソマリアの二つの視点を持つ。しばしば、「イタリア人か？ソマリア人か？」と聞かれ、「どちらか一方になど、なれるわけがない」と語るそれは、ほとんどお喋りと言えるリズムカルなものだ。すぐに出版社の目を引いたので、サンジオルジは、エクセトラ賞から同様の移民二世の女性（ソマリア、インド、エジプト）ばかり四人の文章を所収した選集『ペーコレ・ネーレ（黒い羊たち）』⁵⁰を提案した。いずれも親世代との齟齬や祖国とイタリアの文化に跨った暮らしを語ったものだったが、瞬く間に五刷を記録した。つまり、よく売れ、イタリア社会に受け入れられたこの一冊は、「移民理解の一助のため」とするエクセトラの目的を大いに達成したのである。しかし、この一冊の著者たちは、イタリアの習慣、文化、教育の中で育っていたので、異文化間の移動を経験していない。その文章は、厳密に言えば、エクセトラが定義した「移民文学」から外れる。名付けるなら、「新しいイタリア人によって書かれた文学」となり、当初の「移民文学」と同じ地平に置くべきではないとサンジオルジは考え、新しい文学のためには新しい受け皿を設けるべきだとの結論に至ったのである。また、移民文学に該当する移民一世の参加は、減少傾向にあったので、「移民のため」とする文学コンクールの終了を決断したのである。以上、自身の経験を書きたい。聞いてほしいという移民の要望に応じて、彼らの発話の機会を築いたサンジオルジへのインタビューを中心に述べてきた。

自身の言葉で自らを語る。それはつまり、無視され、差別されてきた移民たちの、いわば見えない存在からの脱出、不可視性からの脱却だった。移民の集団が、ポストコロニアル研究がいうところの社会的下層にある従属した存在、いわゆるサバルタンであるとするなら、彼らの発話の空間は存在しないとされている。しかし、移民のためのエクセトラ文学コンクールは、いわばサバルタンの語りが集められた空間だったのである。

おわりに

12年続いた移民のためのエクセトラ文学コンクールは終わったが、この間寄せられた1800点の作品が残った。これだけのボリュームの移民文学のアーカイヴは他の諸国にはない。さらにこの作品群は、アカデミックな移民文学研究グループを誕生させていた。その一つが、ローマ大学ラ・サピエンツアの比較文学科教授A・ニシを中心とするグループである。このグループは、イタリアにおける移民文学の誕生の経緯が、加熱する報道によってもたらされたものであることから、文化人類学的視野も加味した研究視点を保持し、多国籍の移民が、イタリア社会にいかなる影響を及ぼすかという、「クレオール化」に研究主題を置く。また、『クマー・クレオーレ（Kúmá creole）』誌を発行し、データバンク・バシーリを運営してヨーロッパやイタリアの内部的な変化に注目した。もう一つの研究グループは、ボローニャ大学イタリア語研究科を中心とし、移民作家と作品の分析を行う。国際的な研究会を開催し、発表の研究論文を年間誌『ス

クリットゥーリ・ミグランティ (Scrittura Migranti)』に所収し、発行している。中心的な教授 F・ベッザロッサは、「移民の著作は必ずしも書かれた言語の文化のみに所属するものではなく、作者の出身地域、言語、文化にも属しており、また、移動を通して書かれた移民の著作は、文学的ジャンルや潮流といった枠内のものでもない」と述べ、「グローバル化する我々の時代の共通経験ではないだろうか」⁵¹⁾と、移動が常態化した時代の文学について語っている。先行研究者の報告に鑑みれば、日本という筆者の立ち位置からイタリアの移民文学を読むとき、イタリアの社会、文化、移民を取り巻く環境ばかりか、さらにその向こうにある移民作家の出身の言語、文化等々への眺望も持たなければならないということであろう。

注

- 1) Concorso letterario per gli immigrati: Premio Eks&Tra
- 2) Abdelkader Benarab. *Les Voix de l'exil*, L'Haemattan, Paris, 1996. In Mazza, Eugenia. *Writers, directors and storytellers from Africa and The Middle east in contemporary Italy*. University of Wisconsin-Madison, 2008. p. 6.
- 3) Il Gioco degli Specchi: www.ilgiocodeglispecchi.org/libri 平成 29 年 3 月 20 日閲覧
- 4) Gikandi, Simon. *Map of Englishness; Writing Identity in the Culture of Colonialism*, Columbia University Press, New York, 1996. In Mazza, E., op. cit. p. 34.
- 5) Mazza, E. Op. cit. pp. 34.
- 6) 関口英子「解説」, フォルトゥナート, マーリオ&メスナーニ, サラーハ『イタリアの外国人労働者』明石書店, 1994 年, p. 166.
- 7) 1973 年。石油価格高騰により経済が低迷した北部ヨーロッパ諸国が出稼ぎ労働者の新規採用中止という政策転換をした。行き場を失った労働者がイタリアに入国した。
- 8) 入国経路のデータ, 海岸線からの上陸が 12%, 北東部の地続きの入国が 15%, 73% が空路観光客として入国したもの。 <http://www.quattrogatti.info> イタリア内務省
- 9) 1986 年法第 943 号「EC 域外の労働者の就業及び労働条件並びに不法移民取締りに関する規定」“Norme in materia di collocamento e trattamento dei lavoratori extracomunitari immigrati e contro le immigrazioni clandestine”
- 10) 関口英子, 前掲書, p. 183.
- 11) 南アフリカからの亡命者ジェリー・エッサン・マスロ Jerry Essan Masslo 殺害事件。当時のイタリアでは, 南アフリカの亡命者は保護対象に無く, マスロはナポリ郊外で季節労働に就いていた。 <http://www.associazionejerryessan.it/> 平成 29 年 3 月 20 日閲覧
- 12) レーガ・ノルド Lega Nord。1991 年, 「北の国民」を発展的に解消させて結党した。
- 13) Dal Lago, Alessandro. *Non-persone: L'esclusione dei migranti in una società globale*, Milano, Feltrinelli, 1999, seconda edizione 2005, p. 25.
- 14) 1990 年法第 39 号「イタリアの領域内に滞在する EC 域外市民及び無国籍者の政治的庇護, 入国と滞在に関する緊急規定」“Norme urgenti in materia di asilo politico, di ingresso e soggiorno dei cittadini extracomunitari e di regolarizzazione dei cittadini extracomunitari ed apolidi già presenti nel territorio dello Stato. Disposizioni in materia di asilo.” 通称のマルテッリは, 法案を主導した当時の副首相 C. Martelli から。
- 15) Khouma, Pap. *Io, venditore di elefanti: Una vita per forza fra Dakar, Parigi e Milano*, a cura di Oreste Pivetta, Garzanti, Milano, 1990.
- 16) Fortunato, Mario. Methnani, Salah. *Immigrato*, Theoria, Roma, 1990.

- 17) Gnisci, Armando. *Ventennio*, in <http://armandognisci.homestead.com/ventennio.html>
- 18) Mazza, E. op. cit. p. 20.
- 19) Khouma, P. in *El-Ghibli* 2010. <http://www.el-ghibli.provincia.bologna.it> 平成 29 年 3 月 20 日閲覧
- 20) Pezzarossa, Fulvio. "Forme e tipologie delle scritture migranti", *Migranti*, a cura di Roberto Sangiorgi, Eks&Tra Editore, 2004. pp. 23.
- 21) Fortunato, M., Methnani, S., *Immigrato*, Bompiani, 2006. p. VII.
- 22) Wakkas, Yousef, Tra due mondi: Mine vaganti, *Caffè no.6, febbraio*. 1998.
- 23) Mazza, E., op. cit. p. 2.
- 24) Vanvolsen. Serge. 'Dagli elefanti a nonno Dio. Il rinnovo del codice linguistico italiano con le scritture migranti'. *Leggere il testo e il mondo: Vent'anni di scritture della migrazione in Italia*, a cura di Pezzarossa, F. Bologna, CLUEB, 2011. p. 10-11
- 25) Saidou Moussa Ba 在ダカール, ガストン・ベルジュ大学フランス文学教授
- 26) Shirin Razanali Fazel ソマリア内戦下, 祖国の美を書く作家。現在イタリア在住
- 27) AA. VV., *Le voci dell'arcobaleno*, a cura di R. Sangiorgi, Fara Editore, Santarcangelo di Romagna, 1995. p. 9.
- 28) Wakkas, Y. op. cit.
- 29) AA.VV., 1995. op. cit.
- 30) Caritas Italiana, *Immigrazione dossier statistico*, edizione IDOS, Roma, 2003, p. 7.
- 31) Dal Lago., A., op. cit. p. 11.
- 32) Decreto Dini, Legge 335, 8 agosto 1995. 1990 年のマルテッリ法第七条の改訂
- 33) AA, VV., *Mosaici d'inchiostro*, a cura di Roberta Sangiorgi, Fara Editore, Santarcangelo di Romagna, 1996.
- 34) AA, VV., *Memorie in valigia*, a cura di Roberta Sangiorgi, Fara Editore, Santarcangelo di Romagna, 1997.
- 35) AA, VV., *Destini sospesi di volti in cammino*, a cura di Roberta Sangiorgi, Fara Editore, Santarcangelo di Romagna, 1998.
- 36) Pezzarossa, F., op. cit. p. 22.
- 37) Pezzarossa, F., "Vent'anni di testi", *Nigrizia-febbraio*, 2011. p. 46.
- 38) Dipartimento per le pari opportunità Presidenza del Consiglio dei Ministri.
- 39) Laura Balbo: Ministro per le pari opportunità della Repubblica Italiana 在 1998-2000.
- 40) Carlo Azeglio Ciampi: Presidente della Repubblica Italiana 在位 1999-2000.
- 41) Associazione Multiculturale Eks&Tra
- 42) *Basili-V* Bollettino di sintesi, dati aggiornamenti al 27 febbraio 2012, a cura di Maria Senette, <http://docplayer.it/> 平成 29 年 3 月 20 日閲覧
- 43) Ministero Pubblica Istruzione, Dipartimento per le Pari Opportunità, Ministero per i Beni e la Attività Culturali. <http://www.eksetra.net/> 平成 29 年 3 月 20 日閲覧
- 44) Gëzim Hajdari, 1996, Premio Eks&Tra, Premio E. Montale. 2000, Premio Umberto Saba.
- 45) Hajdari, G. *Ombra di cane*, Dismisuratesti, Frosinone, 1993.
- 46) Toppan, Laura. *Gëzim Hajdarri, il poeta dell'esilio*, www.altritaliani.net/ 平成 29 年 3 月 20 日閲覧
- 47) Gazzoni, Andrea. L'intentio epica dell'esilio: Gëzim Hajdarri, *Scritture Migranti 1*, a cura di F. Pezzarossa, Clueb. Bologna, 2008. p. 53.
- 48) Gazzoni, A. Ibid., p. 53.
- 49) Tamara Jadrečić, 2000, Premio Eks&Tra, 2004, Premio Italo Calvino.
- 50) Scego, I. Kuruvilla, G. Mubiayi, I. Wadia, L., *Pecore Nere*, a cura di Flavia Capitani e Emanuele Coen, Editori Laterza, Roma, 2005.
- 51) Pezzarossa, F., Vent'anni di testi, in *Nigrizia*, 2011. p. 46.